令和５年度

外輪橋遺跡資料整理だより

令和 5 年 12月19日
阿賀野市 生涯学習課
株式会社 帆 苅 組

１．はじめに

令和２年度に発掘調査を実施した市内里字外輪橋地内の「外輪橋遺跡」について、６月から発掘調査報告書を作成するための資料整理を行っています。今回は資料整理をとおして新たに分かったことについてご報告します。

２．資料整理の成果

発見された遺構で注目されるのは、橋と思われる遺構です。川跡を横切るように杭列が並んでおり、橋脚（きょうきゃく）と考えられます（第１図）。両端の杭は丸木、中間の杭は丸木を分割したものが使用され、規則性が見られます。現在は杭の年代測定分析を行っています。平安時代（約 1,200 年前）の橋であれば、県内では類例がほとんどなく、とても貴重な資料になります。

集落の南東端では、須恵器（すえき）の大甕（おおがめ）の破片をドーム状に伏せて並べ、その中に土師器（はじき）の椀を入れた遺構が発見されました（第２図）。大甕は焼きゆがみが見られる不良品です。この付近には、小さな穴に扁平な礫をたくさん入れた集石（しゅうせき）もありました。礫はいずれも白色系のもので統一され、意図的に集めたものであると考えられます。この白石は、現在も阿賀野川の河原で採集できます。

このように、使用できない大甕をあえて遺跡に持ち込み土師器椀と一緒に設置することや、特徴的な白石が１か所に集められていることなどから、この場所では祭祀（さいし）・儀礼（ぎれい）がおこなわれていた可能性があります。

第１図　橋脚　出土状況

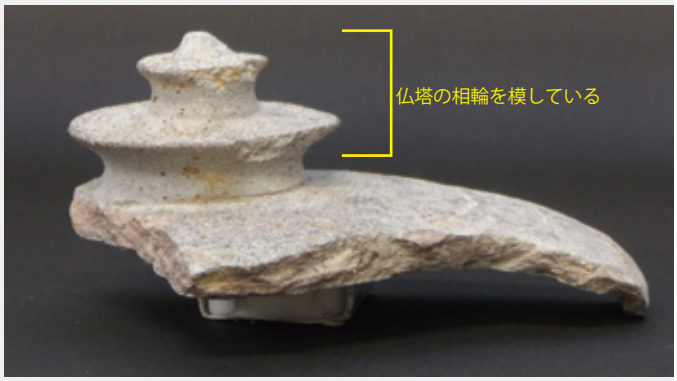
ドーム状に並べられた須恵器の大甕　　集石（白色の自然礫）

第２図　儀礼が行われていたと想像される遺構

遺物は、平安時代の土師器、須恵器が出土しています。須恵器では仏塔の最上部にある相輪（そうりん）を模した蓋があり、珍しいものです（第３図）。

このほかに、当時の奢侈品（しゃしひん）（高級な品物）である緑釉陶器（りょくゆうとうき）があります（第４図）。緑釉陶器は主に平安京がある京都周辺のほか、愛知県や岐阜県で生産されていました。

阿賀野市内で緑釉陶器が多く出土した同時期の遺跡には、百津にある三辺稲荷（さんべんいなり）遺跡があります。三辺稲荷遺跡では、このほかに墨で文字や絵が書かれた墨書（ぼくしょ）土器もたくさん出土しています（第５・６図）。阿賀野川に隣接する河川流通の中心的施設、もしくは役所であったと考えられます。



第３図　須恵器の蓋

３．丘陵と平野部の関係

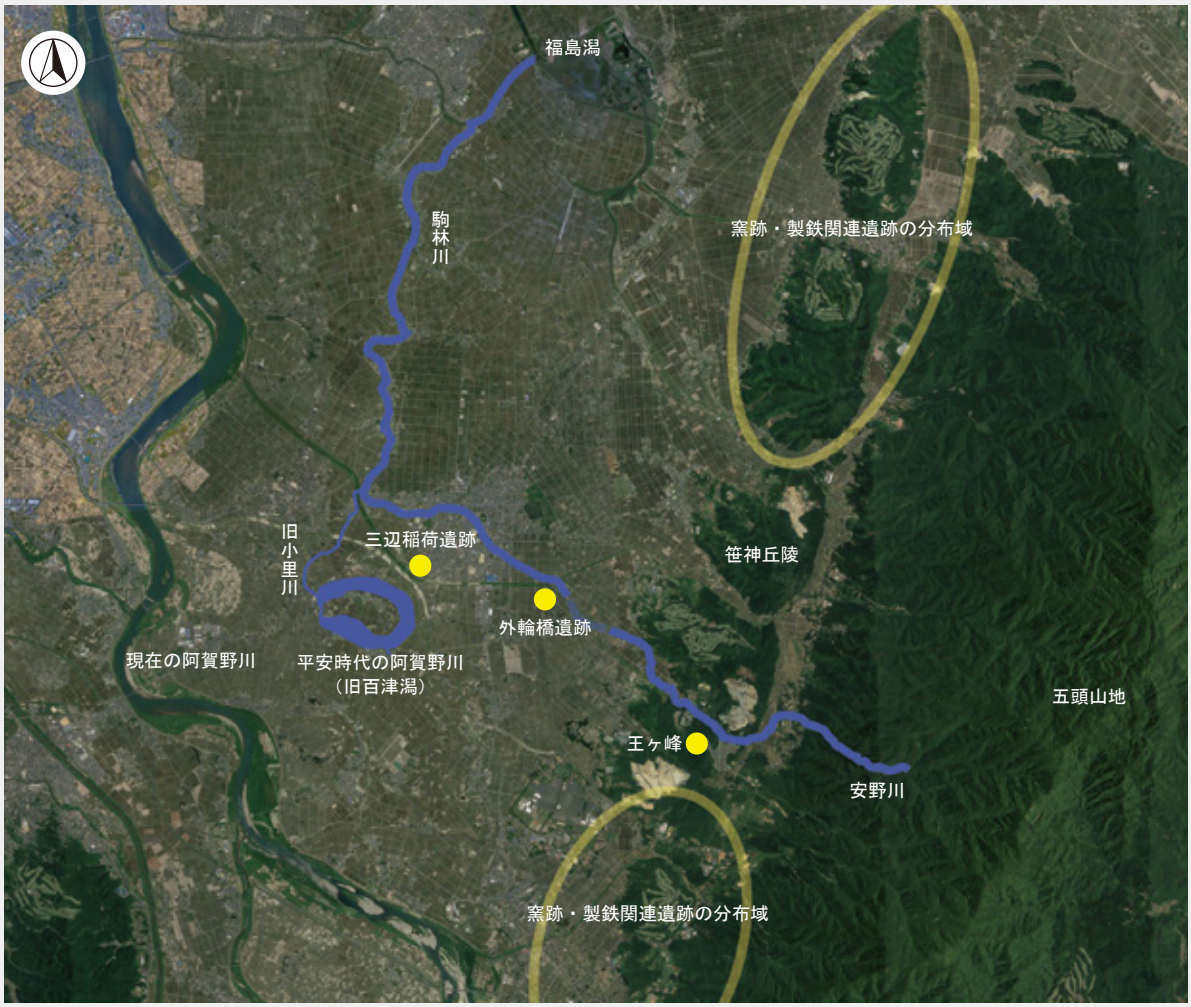
平安時代の阿賀野川は、現在よりも東側を流れていました。この頃の阿賀野川の痕跡は、江戸時代の絵図に「百津潟（ももづがた）」として描かれています。外輪橋遺跡は、平野部と丘陵の中間に位置し、遺跡の北側には安野川が流れています。昔の安野川は水原市街を通り抜け、小里川と合流し、駒林川となって福島潟に注いでいました（第６図）。

笹神丘陵では、須恵器や鉄が盛んに生産されていました。これらの生産遺跡は丘陵の南北に分布し、安野川周辺にはありません（第６図）。生産遺跡がないこの区域は、木材資源の供給地であったと考えられます。江戸時代には幕府や藩が所有する「御林（おはやし）」が大室の王ヶ峰（おおがみね）にありました。また、安野川では「木流し」が行われており、材木を平野部に供給していました。三辺稲荷遺跡の「木」と書かれた墨書土器は、外輪橋遺跡を介した木材の流通に関係があったのかも知れません。

このように、丘陵からは須恵器・鉄・材木、平野部からは緑釉陶器など遠隔地の奢侈品などが行き交い、丘陵と平野部が強く結びついていたようです。また、遺跡で行われた祭祀・儀礼には、丘陵で生産された須恵器、阿賀野川で採集された白石の両方が用いられ、丘陵と平野部の人々の密接な交流がうかがえます。外輪橋遺跡は物流の中継点であり、この場所を大切に思う当時の人々の心情の一端を垣間見ることができる貴重な遺跡です。

第４図　出土した緑釉陶器

第５図　三辺稲荷遺跡出土の緑釉陶器（左）・墨書土器（右）



第６図　丘陵と平野部の関係